

ある。藤田まこと氏は軽妙な喜劇役者であった。後年、藤田まこと氏は婿入りした嫁と姑に弱い平役人でありながら、殺し請け負いの仕事人を「必殺シリーズ」で演じ、また「剣客商売」では女好きの渋くて老獪な剣客を重厚かつ軽快に演じていた。

ある。藤田まこと氏は軽妙な喜劇役者であった。後年、藤田まこと氏は婿入りした嫁と姑に弱い平役人でありながら、殺し請け負いの仕事人を「必殺シリーズ」で演じ、また「剣客商売」では女好きの渋くて老獪な剣客を重厚かつ軽快に演じていた。

たものである。弁当は汽車の中  
 で食べた。  
 わたしは、すでに映画「人間の条件」を見ていた。空前のベストセラーとなった五味川純平の同名小説の映画化である。昭和18年の満州。梶と美代子夫婦が、現地人の工人に過酷な仕事を重厚かつ軽快に演じていた。

までも高校の同級会に出席すると、女の同級生が「岡部さんは今午後から学校に出てきよらした」と言う。人は、つまらんことやどうでもいいことはよく覚えていけるものである。  
 劇作家になって俳優座にも戯曲を提供するようになり、俳優ばかり覚えていた。そうだ、加藤剛氏も「剣客商売」に出演されていたのではなかったか。わたしの舞台もよく見に来てくれる。勉強好きで謙虚である。  
 映画館と白黒のテレビ、この二つがわたしの人生の師匠である。学ぶべきことが多い映画やテレビがいっぱいあった時代である。あの時代の映画やテレビのシーンや台詞はいまでもよく覚えている。やはり、若い時代の吸収力は凄（こわ）いものがある。ズボンの後ろのポケットに突っ込んでいたアルチュール・ランボアの詩集。アンドレ・ジイドの「狭き門」。武者小路実篤の小説。黒澤明監督の映画。そのなにもかにもに影響を受けて今日のわたしがいる。

## 若い時代の吸収力

高校時代、わが家の白黒テレビの二つのテレビドラマがわたしを虜にした。一つは藤田まこと氏の「てなもんや三度笠」である。藤田まこと氏演じるあんなかけの時次郎が小屋から「俺がこんなに強いのはあたり前田のクラッカー」と言って登場して番組が始まる。小坊主の珍念役白木みのる氏とのコンビは絶品であった。主題歌が流れる。ゲストは関西の錚々たる俳優で

高校3年の後半になると、高校も出欠にうるさくなくなつた。家で受験勉強する奴は勉強しろと言った感じであった。わが意を得たりと午前中はわが家の白黒のテレビで「人間の条件」を見て、午後から伊万里高校までガラガラの汽車で通学し

を強いる現場監督一派に対抗する物語である。映画の梶を演じる仲代達矢氏は風貌が立派で英雄過ぎる感じであった。  
 テレビの「人間の条件」の梶役は加藤剛氏である。いまの言葉で言うと、わたしはテレビの

座所属の加藤剛氏とも話をする機会があった。「わたしはテレビの人間の条件に触発されて、この世界に入ったようなものです」と素直に告げた。加藤剛氏は「ああそうですか」とあの笑顔で応じてくれた。わたしは「人間の条件」は「人間の条件」と

座所属の加藤剛氏とも話をする機会があった。「わたしはテレビの人間の条件に触発されて、この世界に入ったようなものです」と素直に告げた。加藤剛氏は「ああそうですか」とあの笑顔で応じてくれた。わたしは「人間の条件」は「人間の条件」と